～　じろはったん　～

地元、大蔵地域で生まれ育ち、大蔵小学校で教鞭をとられていた日本の児童文学作家の森はな氏の代表作である。

【ストーリー】

次郎八（じろはち）通称「じろはったん」という知的障害のある青年を主人公に繰り広げられていく素直で優しく心温まる作品である。

村で人気者のじろはったんは、いつも子どもたちと一緒にいて、鬼ごっこや本を読んでもらったりと楽しく過ごしていました。子どもたちは、じろはったんのことが大好きでした。じろはったんもみんなのことが大好きでしたが、特に、いつもじろはったんをかわいがってくれるしんやんは、特別に大好きでした。しんやんは左官屋として働く好青年でした。戦争が始まり、しんやんに赤紙が届きました。しんやんは戦争に行くことになりました。しかし、じろはったんは、そのことが理解できません。ただ、大好きなしんやんがいなくなることがさびしく、悲しく感じていました。

しばらくすると戦争はますます激しくなり、都会では空襲が激しくなりました。大蔵の村には、神戸からの子どもたちがたくさん疎開をしてきました。全国的に物資の少ない貧しい時代でしたが、村人たちは疎開してきた子どものために必死で食べ物を用意したり、家から離れている子どもたちに寂しさを紛らわせようと子どもたちのいるお寺に集まっていました。じろはったんもまた、疎開してきている子どもたちのために食料の調達に走り回りました。

ある日、しんやんが戦死し、海に沈んでしまったというしらせがじろはったんに届きました。しんやんの帰りを首を長くして待っていたじろはったんですが、しんやんが死んでしまったということも理解できませんでした。何とか、しんやんと連絡を取りたいと願うじろはったんにお寺の和尚さんからしんやんに手紙を書こうと持ちかけられました。字の書

けないじろはったんは一生懸命字を勉強し、「し・ん・や・ん」の文字が書けるようになりました。和尚さんの思いついた方法とは、「し・ん・や・ん」の文字を丈夫な泰山木（たいさんぼく）の葉っぱに書き、しんやんが眠っている海に流すというものでした。

純朴なじろはったんは、一生懸命字を練習し、和尚さんと一緒に文字を書き、思いを届けようと、いっぱい、海に葉っぱを浮かべます。

心優しいじろはったんとじろはったんを取り巻くまわりの人々の温かさが読む人みんなに広がって行きます。

【著者】

森はな　（1909 年（明治 42 年）4 月 16 日 – 1989 年（平成元年）6 月 14 日）

兵庫県養父郡大蔵村（現・朝来市和田山町）宮田で、生まれる。1924 年に大蔵小学校の高等科から兵庫県明石女子師範学校（神戸大学発達科学部の前身）に進み 1928 年に卒業した後、養父郡南谷小学校の教員となった。1932 年に結婚。

1936 年に高砂市荒井小学校へ転任となり、夫の実家である加古川市や勤務先の高砂市で暮らした。在職中から学校劇に取り組み、「お祭りに来た兄弟」（1952 年）が NHK 主催の第 1 回近畿学校劇コンクールで最優秀賞を受賞し、翌年も「峠のお祭り」（1953 年）で最優秀賞を受賞した。

小学校教員を退職後、「神戸児童文学『あす』の会」に入会し、会の同人誌である「あす」に作品を発表し始めた。そして日本児童文学者協会の会員となった。

1973 年に 64 歳で初めての出版作品で代表作となる「じろはったん」を出し、1974 年には第 7 回日本児童文学者協会新人賞受賞した。「遅咲きの新人」と評価された。

1977年に加古川市の自宅で児童文学の会「森はな学校」を発足。灰谷健次郎、あまんきみこや地域の文学愛好家が参加した。

1982年に絵本「こんこんさまにさしあげそうろう」で第5回絵本にっぽん大賞受賞。1984年に第1回加古川文化賞を受賞した。1987年に第41回神戸新聞平和賞を受賞した。1989年に「赤いマントのおばあちゃん」の制作途中に亡くなった。

出身校の大蔵小学校では、1992年ごろから、代表作「じろはったん」を歌物語にして音楽祭などで披露している。今では、学校の伝統的作品となり、卒業生がみな知っている伝統音楽となっている。

【森はな氏の代表作】

- じろはったん
- ハナ先生ものがたり
- わたしトシエです
- ひいちゃんとタチアオイの花
- もどってくるもどってこん
- おばあさんは落語屋さん
- めんどりコッコ
- こんこんさまにさしあげそうろう
- キツネの花よめいしょう
- おさよつばき
- 一二(ほい)とうげ
- わたしはめんどりコッコです
- お葉つきいちょう
- こはる先生だいすき
- キツネとしゅんぺいじいさん
- 土の笛